

研究論文

「ふつう」に対する感情反応に個人差要因が及ぼす影響

—被験者内要因計画を用いた検討—¹⁾

黒石 憲洋¹、佐野 予理子²

日本人の「ふつう」に対する感情反応に対して、個人差要因が及ぼす影響について検討をおこなった。相対的遂行を被験者間要因とした先行研究（黒石ら，2010 など）では個人差要因の影響は認められていないが、本研究は被験者内要因として扱い、改めて検討をおこなった。社会的比較を明示した仮想場面を用いて質問紙実験をおこなった結果、先行研究と一致して、社会的比較において他者よりも優れた成績を収めることが肯定的感情をもたらすのに対して、他者と同程度の成績を収めることで、否定的感情が低く、安静状態が高くなることが示された。個人差要因については、独自性欲求には社会的比較のインパクトを緩衝するような効果があり、特に他者よりも成績が劣る状況で顕著であった。一方、拒絶感受性には社会的インパクトの影響を増幅するような傾向がみられたが、その効果は比較的弱いものであった。これらの結果を踏まえ、「ふつう」に対する感情反応を検討する上での個人差要因の扱い方について議論をおこなった。

キーワード：「ふつう」、感情状態、被験者内要因計画、独自性欲求、拒絶感受性

問題

文化論や比較文化論の多くが、欧米文化とは異なる「日本人」的な特質があることを繰り返し指摘してきた。それらに共通するのは日本人の相互依存性である。日本人は周囲の人々の様子や反応を常に気に掛け、個性的で独自の存在であるよりも他者と変わらず同じであること好むとされる（阿部，2002；荒木，1973；土居，1971；濱口，1982 など）。すなわち、日本人には周囲の他者の行動、すなわち記述的規範（Cialdini, Kallgren, & Reno, 1991）から逸脱することを避け、「ふつう」であることによって適応的な心理状態（広義の Well-Being）を得るといったような、「ふつう」を志向する傾向があるとされてきた。

1 日本教育大学院大学 学校教育研究科

2 関東学院大学 人間共生学部 コミュニケーション学科

「ふつう」に対する感情反応に関する実証研究

文化論における指摘にも関わらず、そもそも「ふつう」であることが適応的な心理状態につながるという心理現象に関する直接的な研究は少なく、またそのような仮説を支持する実証研究も必ずしも多くはなかった（例外として、佐野・黒石，2009a；高田，2000）。

その中で黒石・佐野らの一連の研究（佐野・黒石，2009b など）では、場面想定法を用いた質問紙実験により「ふつう」に対する感情反応の検討がおこなわれてきた。これらの研究では、社会的比較を含む仮想場面を提示して、周囲の他者との比較により示される相対的遂行の操作をおこない、その状況における感情状態の測定がおこなわれた。これらの研究の結果は、一貫して相対的遂行に対する感情反応には2つの異なるプロセスがあることを示唆している。

ひとつは、相対的遂行の肯定的感情に対する線型的な影響である。すなわち、周囲の他者よりも高い成績を収めた場合には肯定的感情が高く、低い成績を収めた場合には肯定的感情が低くなるという影響である。もうひとつは、周囲の他者と同程度の遂行を収めることが否定的感情の低さや安静状態の高さに関連するという傾向である。否定的感情は、他者と同程度の成績の場合に最も低くなる。他者よりも成績が低い場合に否定的感情が高くなるのはもちろんであるが、他者よりも成績が高い場合にも否定的感情が高くなる傾向がある。一方で安静状態は、他者と同程度の遂行の場合に最も高くなる。他者よりも成績が高い場合にも低い場合にも安静状態は低くなる傾向を示す（佐野・黒石，2008a など）。後者の相対的遂行に対する否定的感情や安静状態の反応は、周囲の他者の記述的規範から逸脱しないことが適応的な心理状態をもたらしているという意味において、まさに「ふつう」を好む傾向を示しているといえる。

「ふつう」に対する感情反応の頑健性

先行研究から「ふつう」に対する感情反応は極めて頑健な傾向であることが明らかとなっている。

例えば、社会的比較が生起する状況については、課題への自我関与（Sherif & Cantril, 1947）や状況の拘束力（外山，2004）に関わらず結果は一貫している（佐野・黒石，2006，2012 など）。また、周囲の他者との関係性については、非常に親しい関係（親友）を除いては、友人であれ、知人であれ、その場かぎりの初見の他者であれ、結果は一貫している（佐野・黒石，2009b など）。

また、「ふつう」に対する感情反応については、個人差要因の影響を受けないことも示されている。これまでの研究で、性別や年齢による結果の差異は認められていない（黒石・生井・佐野，2015；黒石・佐野，2013a，2013b）。

パーソナリティ特性について検討した研究においても、独自性欲求（黒石・Erlandsson・佐野，2010；佐野・黒石，2008b）、成功回避動機（黒石・佐野，2012a）、文化的自己観（黒石・佐野，2013c）、集団主義傾向（黒石・佐野，2012b）といったパーソナリティ特性については、感情状態に対する主効果はみられても、相対的遂行との交互作用は認められておらず、これらの個人差要因は相対的遂行と感情状態の関係を調整しないことが示されている。

これらの研究は、「ふつう」に対する感情反応が課題や状況、性別・年齢、パーソナリティ特性などの個人差要因に関わらず、極めて頑健な傾向であることを示している。

「ふつう」に対する感情反応と個人差要因

ただし、これまでの研究では相対的遂行を被験者間要因 (Between-Subject Factor) として扱い、操作してきた。したがって、測定された個人差要因は相対的遂行の1条件を提供した回答者の感情反応のみに対応するものであった。すなわち、異なる複数の相対的遂行に対する感情反応のパターンと比較し得るものではなかった。そこで、本研究では相対的遂行を被験者内要因 (Within-Subject Factor) として扱うことで、改めて個人差要因の影響について検討をおこなうこととした。本研究では、個人差要因の指標として、独自性欲求および拒絶感受性を採用した。

独自性欲求は、Snyder & Fromkin (1980) によって提唱された概念である。彼らは、性格や態度に関して極度に他者と類似しているというフィードバックが (中程度の類似性フィードバックと比較して)、ネガティブな情動を喚起し (Fromkin, 1972)、非同調性や新奇性希求をもたらす (Fromkin, 1970 など)、といった研究結果に基づき、それらは「ユニークな存在でありたい」とする人間がもつ基本的欲求が妨げられるために生じるとして、独自性欲求 (Need for Uniqueness) を概念化した。

「ふつう」であることを好む傾向について考える上で、「ユニークな存在でありたい」という願望である独自性欲求は、ある意味で対局にある欲求であるといえる。実験研究においても、独自性欲求高群では類似性が高いというフィードバックを受けた場合に自尊感情が低下するのに対して、独自性欲求低群では類似性が高いというフィードバックを受けた場合に自尊感情が上昇する、という結果が得られているとされる (Ganster, McCuddy, & Fromkin, 1977)。「ふつう」であることに対する感情反応への影響を考える上で、独自性欲求が「ふつう」を好む傾向の対義的概念であるのか、あるいは「ふつう」を好む傾向を調整する要因であるのかは明確ではないものの、本研究で取り上げる指標として有益であると判断し、これを採用した。

一方、拒絶感受性は、Downey & Feldman (1996) により提唱された概念である。多くの臨床家の指摘 (Horney, 1937; Maslow, 1987; Sullivan, 1937) を待つまでもなく、他者からの拒絶を回避し、受容を獲得したいという欲求は、人間にとって基本的なものであると考えられる (Baumeister & Leary, 1995; McClelland, 1987)。特に、社会的拒絶の経験は Well-Being の低下や対人機能の破綻を引き起こし、拒絶されたという知覚²⁾は敵意や失意、嫉妬などの感情をもたらすとされる (Baumeister & Leary, 1995; Coie, Lochman, Terry, & Hyman, 1992; Coyne, 1976; Dodge & Somberg, 1987; Lefkowitz, & Tesiny, 1984; Salovey & Rodin, 1986 など)。Downey & Feldman (1996) は、このような拒絶を知覚したりそれらに反応したりする際の個人差を拒絶感受性 (Rejection Sensitivity) として定義した。

所属する集団の中で「ふつう」でないという状況は、まさに準拠集団の記述的規範から逸脱していることを意味している。所属している集団からの逸脱は、嘲笑や攻撃といった集団成員からのネガティブな行動を引き起こし、最終的には集団成員性の否定や集団からの排斥に繋がるリスクを常

にはらんでいる (Asch, 1951; Deutsch & Gerard, 1955)。したがって、集団の記述的規範からの逸脱は、もっとも早期の社会的排除の手掛かりである。拒絶感受性の高い個人は、このような微細な手掛かりであっても、敏感に感じ取ってそれらに過剰に反応することが予想される。拒絶はネガティブな情動を引き起こすことが明らかとなっており、すでに否定的感情 (および安静状態) との関連が明らかとなっている「ふつう」をめぐる心理状態について検討する上でも重要な概念となると考え、これを採用した。

本研究の目的

本研究の主な目的は以下の 2 つである。

ひとつは、これまでの被験者間要因計画を用いた先行研究で頑健に示されてきた相対的遂行と感情反応の関連について、被験者内要因計画を用いた質問紙実験において検討することである。すなわち、肯定的感情は相対的遂行が高くなるにしたがって線型的に高くなる一方で、周囲の他者と同程度の遂行である場合に否定的感情はもっとも低く、安静状態はもっとも高くなるという予測が被験者内要因計画を用いた検討においても再現されることを確認することである。

もうひとつは、被験者内要因計画を用いた質問紙実験において、相対的遂行と感情反応の関連に及ぼす個人差要因の影響を検討することである。これまでの被験者間要因計画を用いた先行研究では認められていなかった個人差要因について、本研究では独自性欲求と拒絶感受性という 2 つのパーソナリティ特性を取り上げ、相対的遂行が感情反応に及ぼす影響を調整する効果をもちうるのかについて検討をおこなった。

方法

研究方法

「自己意識に関するアンケート調査」と題する調査用紙を配布し、場面想定法による質問紙実験をおこなった。社会的比較を含む仮想場面を提示し、回答者自身が主人公であると想定させた上で、提示した場面における感情状態および「ふつう」認知に関する回答を求めた。最後に、個人差要因の測定をおこなった。

回答者

大学生 26 名を対象としてパネル調査を実施した。ただし、本研究では全 6 回の調査に参加し、5 つのシナリオすべてについての回答、および個人差要因に関する回答をおこなった者のみを分析対象とした。有効回答者は、大学生 17 名 (男性 3 名; 女性 14 名)、平均年齢 20.47 歳 (標準偏差 0.62) であった。

場面設定

イベントでクッキーを販売する場面のシナリオを提示した。周囲の友人の売上 50~60 個と比較し

た主人公の相対的遂行を操作した。極高：103個、高：73個、中：54個、低：37個、極低：8個の5条件を設定した（下表参照）。

あなたは、あるイベントで、クラスメイトの友人4人と一緒にクッキー売りをするようになりました。5人は1日中クッキーを売り歩いた結果、その日の終わりに友人たちとお互いに売り上げを比べ合ったところ、友人たちの売り上げは50～60セットだったのに対して、あなたの売り上げは 103個 / 73個 / 54個 / 37個 / 8個 でした。

※ スラッシュ前後の下線部が実験条件にあたる。全5種類のシナリオが用意された。

測定尺度

第1～5回ではシナリオ提示後、感情状態および「ふつう」認知の測定をおこなった。感情状態の測定には、一般感情尺度（小川・門地・菊谷・鈴木，2000）の5件法24項目を使用した。肯定的感情、否定的感情、安静状態の3つの異なる感情状態を測定する下位尺度からなる。また、各回の最後にチェック項目として、提示された仮想場面を具体的に思い浮かべられたかどうか（現実性）、および商品を多く販売することが規範的行動として捉えられているかどうか（社会的の望ましさ）について、それぞれ5件法により回答を求めた。「ふつう」認知とは、特定の場面に置かれた際の周囲の状況に対する自己の在り方に関する認知である。「ふつう」認知の測定には、先行研究（佐野・黒石，2008aなど）で使用した「ふつう」認知尺度の9項目（「なじんでいる」、「非常識だ」、「違和感を感じる」、「他の人と比べておかしい」、「まわりの人から浮いている」、「まともだ」、「まわりの人と調和している」、「他の人とくらべて適切だ」、「ふつうだと感じる」）を使用した。「全くあてはまらない」（1）から「ぴったりあてはまる」（5）までの5件法により測定をおこなった。

第6回では、個人差要因として2つの異なるパーソナリティ特性の測定をおこなった。ひとつは独自性欲求（Snyder & Fromkin, 1980）である。Snyder & Fromkin（1977）による Uniqueness Scale の翻訳版である独自性欲求尺度（岡本，1985）の5件法32項目を使用した。もうひとつは拒絶感受性（Downey & Feldman, 1996）である。Downey & Feldman（1996）による Rejection Sensitivity Questionnaire の日本語版である拒否に対する感受性尺度（本多・桜井，2000）の18項目を使用した³⁾。元尺度は6件法であるが、他に使用した尺度との統一を図る目的から5件法に改めて実施した。

手続き

本研究は、被験者内要因計画による検討を企図するものであった。したがって、同一の回答者に相対的遂行の5条件すべてを提示し、回答を求める必要がある。しかし、同一の回答者に同時に複数の条件への回答を求めた場合、他の条件に回答したことが後続の条件への回答に影響を与える、持ち越し効果（Carry-Over Effect）が生じる可能性がある。一方で、条件間で調査間隔が開きすぎると、条件に対する心性自体が変化してしまう可能性もある。そこでこれらのバランスを考慮して、

条件間の調査実施間隔を 1 週間とし、計 6 回のパネル調査を実施した。第 1～5 回では相対的遂行の 5 条件のうち 1 条件ずつを提示し回答を求めた。なお、第 1 回において回答者が記入した任意の ID をリスト化してデータの対応を担保するとともに、リストに基づいて 5 条件の提示順序を被験者間でカウンターバランスした。また、第 6 回では全回答者に共通して個人差要因（独自性欲求および拒絶感受性）の測定をおこなった。

結果

想定場面についての検討

想定場面に関するチェック項目の評定値について、理論的中央値 ($Me=3$) との比較をおこなった。その結果、想定場面は具体的に想像されており ($t_{s(16)} > 3.36, ps < .01$)、商品を多く販売することの社会的望ましさも高く評定されていた ($t_{s(16)} > 2.50, ps < .05$)。これらを踏まえて、本研究で使用した仮想場面は、回答者にとって一定の現実性があり、社会的規範が意識される妥当な場面であったと判断した。

使用した尺度に関する検討

使用した尺度について、それぞれ α 係数により信頼性の確認をおこなった。「ふつう」認知尺度については、相対的遂行の 5 条件において $.71 < \alpha < .93$ の値を示した。一般感情尺度の下位尺度については、肯定的感情で $.85 < \alpha < .91$ 、否定的感情で $.68 < \alpha < .92$ 、安静状態で $.77 < \alpha < .91$ であった。これらの尺度については、一定の信頼性が認められたものと判断し、以降は各尺度を構成する項目得点の平均値をそれぞれの尺度得点とした。

第 6 回で測定をおこなった個人差要因については、独自性欲求尺度の信頼性係数は $\alpha=.89$ 、拒否に対する感受性尺度の信頼性係数は $\alpha=.87$ であった。これらの尺度についても、十分な信頼性が確認されたものと判断した。独自性欲求および拒絶感受性については、サンプルの尺度得点の平均値を基準として、それぞれ高群と低群の 2 群を構成した。独自性欲求については、独自性欲求尺度の平均値 $M=2.76$ ($SD=0.54$) を基準として、高群 ($M=3.29, SD=0.37$) と低群 ($M=2.39, SD=0.25$) に分割した。拒絶感受性についても、拒否に対する感受性尺度の平均値 $M=3.29$ ($SD=0.63$) を基準として、高群 ($M=3.80, SD=0.34$) と低群 ($M=2.84, SD=0.45$) に分割した (表 1-1 および表 1-2 参照)。

表 1-1. 独自性欲求に基づく群分け

	平均値 (標準偏差)
高群 ($N=7$)	3.29 (0.37)
低群 ($N=10$)	2.39 (0.25)
t ($df=15$)	6.00 ***

*** $p < .001$

表 1-2. 拒絶感受性尺に基づく群分け

	平均値 (標準偏差)
高群 ($N=8$)	3.80 (0.34)
低群 ($N=9$)	2.84 (0.45)
t ($df=15$)	4.96 ***

*** $p < .001$

結果の処理

相対的遂行 5 条件（被験者内要因）×独自性欲求 2 群（被験者間要因）×拒絶感受性 2 群（被験者間要因）の混合 3 要因分散分析をおこなった。なお、個人差要因間の交互作用が存在しないと推定される訳ではない⁴⁾が、本研究は詳細な仮説を擁する検証研究ではなく、また回答者数の少なさも考慮し、複数の個人差要因を含む 2 次および 3 次の交互作用については分析から除外し、独自性欲求×相対的遂行の交互作用および拒絶感受性×相対的遂行の交互作用⁵⁾のみをモデルに含めて分析をおこなった。

「ふつう」認知

相対的遂行の主効果が有意であった ($F_{(4,56)}=29.51, p<.001$)。多重比較の結果、極高条件－低条件間および高条件－低条件間以外のすべての比較対で有意差がみられた (図 1-1 参照)。独自性欲求×相対的遂行の交互作用に傾向がみられ ($F_{(4,56)}=2.26, p<.10$)、相対的遂行低条件において独自性欲求高群で低群よりも「ふつう」認知得点が高かった (図 1-2 参照)。また、拒絶感受性×相対的遂行の交互作用に傾向がみられ ($F_{(4,56)}=2.21, p<.10$)、相対的遂行低条件において拒絶感受性低群で高群よりも「ふつう」認知得点が高かった (図 1-3 参照)。独自性欲求の主効果および拒絶感受性の主効果は有意でなかった ($F_{(1,14)}=0.65, ns; F_{(1,14)}=0.77, ns$)。

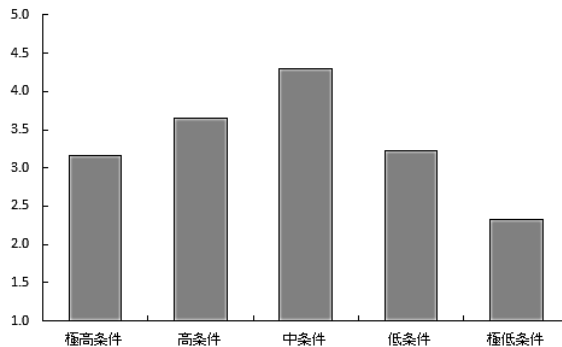


図 1-1. 相対的遂行条件ごとの「ふつう」認知

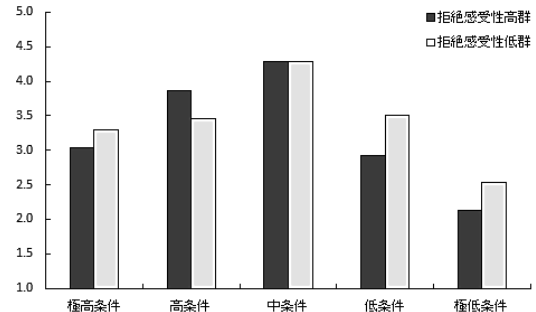
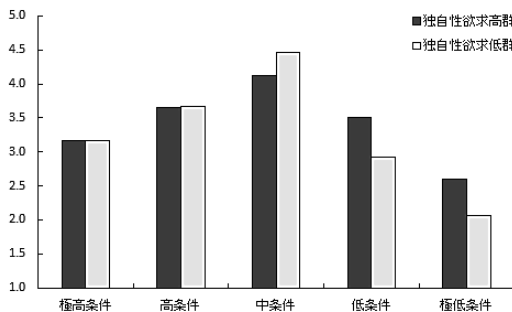


図 1-2. 独自性欲求高・低群ごとの「ふつう」認知 図 1-3. 拒絶感受性高・低群ごとの「ふつう」認知

肯定的感情

相対的遂行の主効果が有意であった ($F_{(4,56)}=38.86, p<.001$)。多重比較の結果、極高条件・高条件・中条件のグループと低条件・極低条件のグループ間に有意差がみられた (図 2-1 参照)。独自性欲求×相対的遂行の交互作用が有意であり ($F_{(4,56)}=8.08, p<.001$)、相対的遂行の極高条件および高条件においては独自性欲求低群で高群よりも肯定的感情得点が高く、相対的遂行の低条件においては独自性欲求高群で低群よりも肯定的感情得点が高かった (図 2-2 参照)。拒絶感受性×相対的遂行の交互作用は認められなかった ($F_{(4,56)}=1.22, ns$) (図 2-3 参照)。また、独自性欲求の主効果および拒絶感受性の主効果は有意でなかった ($F_{(1,14)}=0.00, ns; F_{(1,14)}=0.21, ns$)。

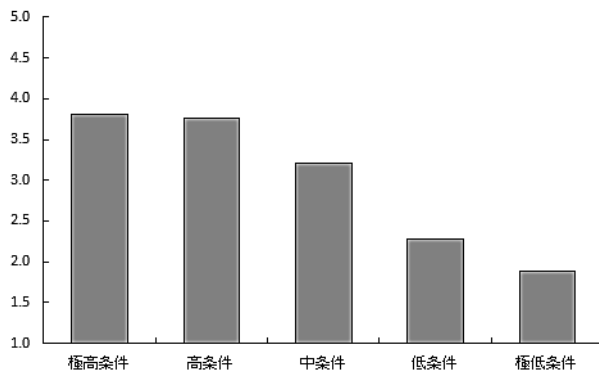


図 2-1. 相対的遂行条件ごとの肯定的感情

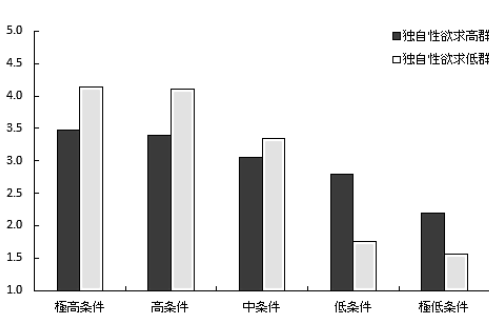


図 2-2. 独自性欲求高・低群ごとの肯定的感情

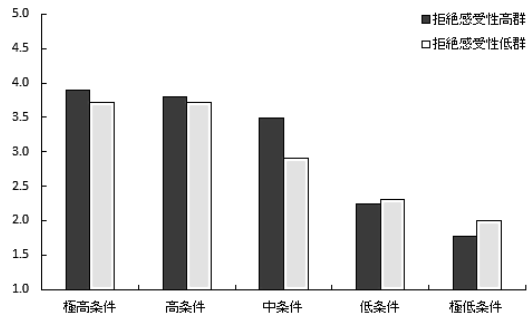


図 2-3. 拒絶感受性高・低群ごとの肯定的感情

否定的感情

相対的遂行の主効果が有意であった ($F_{(4,56)}=26.76, p<.001$)。多重比較の結果、極低条件—その他すべての条件間、極高条件—高条件および中条件間、低条件—中条件間に有意差がみられた (図 3-1 参照)。独自性欲求×相対的遂行の交互作用が有意であり ($F_{(4,56)}=3.55, p<.05$)、相対的遂行低条件において独自性欲求の高群で低群よりも否定的感情得点が低かった (図 3-2 参照)。拒絶感受性×相対的遂行の交互作用は認められなかった ($F_{(4,56)}=1.54, ns$) (図 3-3 参照)。また、独自性欲求の主効果および拒絶感受性の主効果は有意でなかった ($F_{(1,14)}=1.20, ns; F_{(1,14)}=2.40, ns$)。

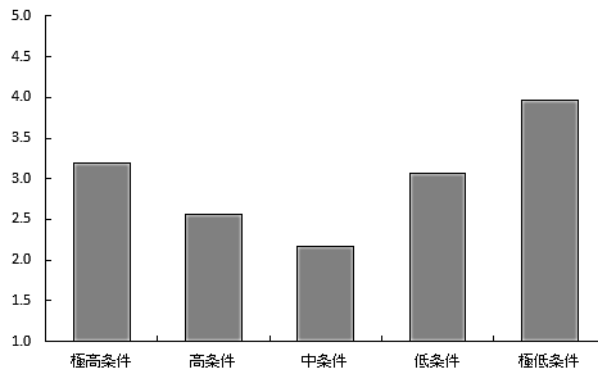


図 3-1. 相対的遂行条件ごとの否定的感情

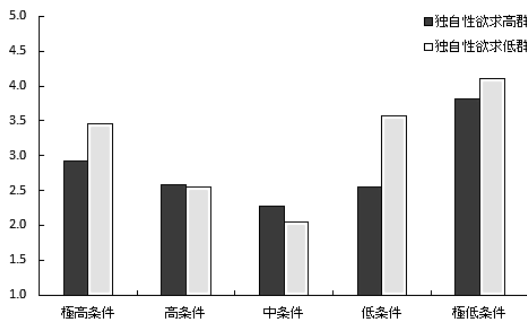


図 3-2. 独自性欲求高・低群ごとの否定的感情

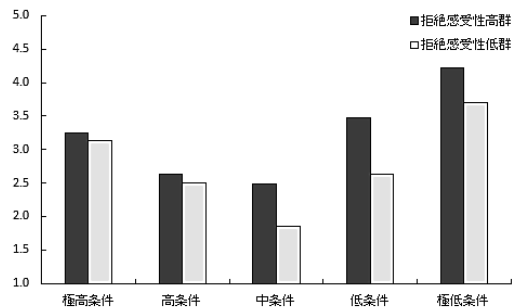


図 3-3. 拒絶感受性高・低群ごとの否定的感情

安静状態

相対的遂行の主効果が有意であった ($F_{(4,56)}=16.23, p<.001$)。多重比較の結果、中条件—その他すべての条件間、高条件—極低条件間、低条件—極低条件間に有意差がみられた (図 4-1 参照)。独自性欲求×相対的遂行の交互作用に傾向がみられ ($F_{(4,56)}=2.09, p<.10$)、相対的遂行低条件において独自性欲求の高群で低群よりも安静状態得点が高かった (図 4-2 参照)。また、拒絶感受性×相対的遂行の交互作用が有意であり ($F_{(4,56)}=3.18, p<.05$)、相対的遂行高条件において拒絶感受性高群で低群よりも安静状態得点が高かった (図 4-3 参照)。独自性欲求の主効果に傾向がみられ ($F_{(1,14)}=3.75, p<.10$)、独自性欲求の高群で低群よりも安静状態得点が高かった。また、拒絶感受性の主効果は有意でなかった ($F_{(1,14)}=0.30, ns$)。

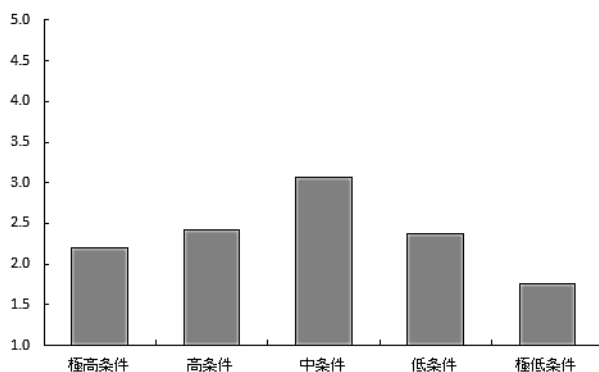


図 4-1. 相対的遂行条件ごとの安静状態

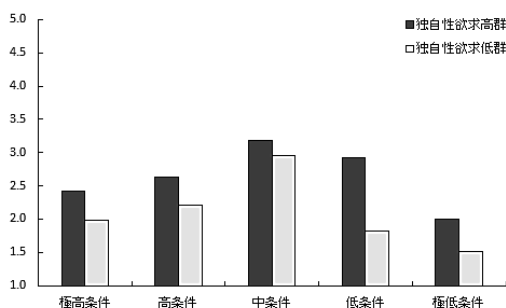


図 4-2. 独自性欲求高・低群ごとの安静状態

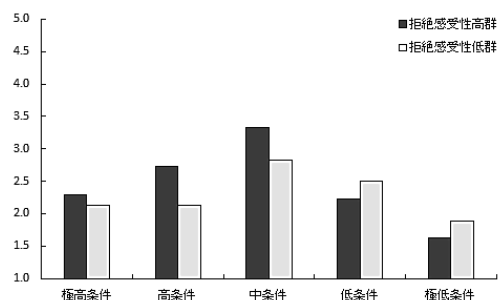


図 4-3. 拒絶感受性高・低群ごとの安静状態

考察

相対的遂行の影響

本研究の主要な目的のひとつは、これまで被験者間要因計画を用いた先行研究において頑健に示されてきた相対的遂行と感情反応の関連について、被験者内要因計画を用いた質問紙実験においても再現されることを確認することであった。

被験者内要因計画を採用した本研究の結果においても、肯定的感情は相対的遂行にしたがって線形的に高くなる（図 2-1 参照）のに対して、周囲の他者と同程度の遂行である場合に否定的感情はもっとも低く（図 3-1 参照）、安静状態はもっとも高くなる（図 4-1 参照）という結果が得られた。被験者内要因計画を用いた本研究において、被験者間要因計画を用いた先行研究（佐野・黒石, 2009b など）と一貫した結果が得られたことから、「ふつう」に対する感情反応は個人内のパターンとしても存在することが確認された。

本研究のサンプルは必ずしも大きくなかったにも関わらず、多くの（被験者内要因の）条件間に有意差が認められたのは、やはり個人間で各条件に対する反応パターンが大きく異なるというよりも、感情反応には一定の共通性があり、その反応パターンの程度に個人差があるのだと考えることができる。すなわち、相対的遂行に対する感情反応は被験者間である程度一貫しており、個人差要因の影響はあくまでも、感情状態に対する主効果あるいは相対的遂行の影響を調整するような効果にとどまるのではないかと思われる。

いずれにせよ、相対的遂行の高さが肯定的感情をもたらす一方で、周囲の他者と比較して「ふつう」であることが否定的感情の低さや安静状態の高さをもたらすという傾向の頑健性が改めて示された結果であるといえよう。

個人差要因の影響

本研究のもうひとつの目的は、これまでの被験者間要因計画を用いた先行研究においては見出されてこなかった相対的遂行と感情状態の関連に及ぼす個人差要因の影響について、被験者内要因計画を用いた質問紙実験において再検討することであった。これについては、独自性欲求および拒絶感受性のそれぞれにおいて一定の影響があることが示唆された。

独自性欲求の影響

独自性欲求を対象とした分析では、「ふつう」認知・肯定的感情・否定的感情において、相対的遂行が感情状態に及ぼす影響を緩衝するような効果があることが示唆された（図 1-2、図 2-2、図 3-2 参照）。すなわち、独自性欲求が高い者は「他者と異なるユニークな存在」であることを求める傾向が強いためか、周囲の他者と異なることを厭わず、相対的遂行が感情状態に及ぼす影響も小さくなるものと思われる。ただし、他者よりも優れている場合に肯定的感情が高まるという訳ではなく（図 2-2 参照）、あくまでも相対的遂行の影響を緩衝する効果にとどまるように思われる。

また、「ふつう」認知も含めて、すべての感情状態において相対的遂行の低条件における独自性欲求の効果が顕著であった(図1-2、図2-2、図3-2、図4-2参照)。したがって、独自性欲求は特に周囲の他者からやや劣っているという意味での逸脱のインパクトを抑制するような効果をもつことが示唆された。すなわち、独自性欲求が高ければ、「ふつう」よりも劣っているという方向での差異を気に掛けず、それによって感情が左右されることも少なくなるものと考えられる。

なお、先行研究(Ganster et al., 1977)からは、独自性欲求が高い者では他者と同じであることがネガティブな心理状態をもたらすことが予測されるが、本研究においてはそこまでの影響は認められなかった(図3-2参照)。これは、今回の実験操作が「極度に類似」していると認知されるものではなかったためであるとも考えられるが、類似性の示される領域も含めて今後の検討課題である。

拒絶感受性の影響

一方、拒絶感受性を対象とした分析では、「ふつう」認知・肯定的感情・安静状態において、相対的遂行が感情状態に及ぼす影響を増幅させるような効果があることが示唆された(図1-3、図2-3、図4-3参照)。すなわち、拒絶感受性が高い者では「他者からの拒絶を回避したい」という願望を叶えるためか、周囲の他者との差異に敏感となり、相対的遂行が感情状態に及ぼす影響が大きくなるものと思われる。

また、「ふつう」認知においては相対的遂行の低条件、安静状態においては相対的遂行の高条件における拒絶感受性の効果が顕著であった(図1-3、図3-3参照)。拒絶感受性の影響は一貫しない部分もあるが、特に安静状態においては周囲の他者よりも優れているという意味での逸脱のインパクトを強調するような効果をもつ可能性がある。すなわち、拒絶感受性が高ければ、「ふつう」よりも優れているという方向での差異さえも気に掛け、素直に安心できないのかもしれない。ただし、この点については「ふつう」認知との対応も含めて、今後さらに検討すべきである。

総合的考察

これらの結果を総合すると、本研究で取り上げた個人差要因は、相対的遂行がもつ認知や感情へのインパクトを調整するものであるように思われる。独自性欲求は「ふつう」であるかどうかに対する敏感さを緩和させ、特に「ふつう」から劣っているという意味での逸脱に対する感情反応を緩やかにする効果があると考えられる。一方、拒絶感受性は「ふつう」からの逸脱に対する敏感さを増大させ、「ふつう」よりも優れているという方向での逸脱に対しても強い感情反応が惹起されるのかもしれない。

ただし、本研究は被験者内要因計画を採用したこともあり、サンプルは必ずしも大きいものではなかった。また、独自性欲求については岡本(1985)に報告されているサンプルと比較して得点がやや低く、拒絶感受性については本多・桜井(2000)に報告されているサンプルと比較して得点がやや高いサンプルであった⁶⁾。このことが結果に影響している可能性がある。すなわち、標準サンプルであれば、個人差要因の高群一低群間により顕著な差異が認められた可能性がある。また、標

準サンプルであれば、個人差要因においてより極端な個人あるいは集団を取り上げた分析も可能となるだろう。今後はさまざまな検討を可能にする意味でも、より多くの回答者からのデータを収集することが望まれる。

今後の展望

これまで被験者間要因計画を用いた先行研究では見出されてこなかった個人差要因の影響が、被験者内要因計画を用いた本研究では認められた。このことから、個人差要因の影響は同一個人内の感情反応のパターンに関連している可能性が高いといえる。したがって、個人差要因の影響を検討する場合には、被験者内要因計画を用いることが有効であると考えられる。しかし、持ち越し効果の問題や回答者への負担などを考慮すると、被験者内要因計画を用いる質問紙実験の実施には限界があることも事実である。相対的遂行に対する感情反応自体は比較的小さいサンプルにおいても頑健であることが明らかになってはいるものの、被験者間要因計画によってパーソナリティ特性との関連について検討する場合には、サンプルを大きくすることで個人差による誤差を相対的に小さく抑制する必要があることが示唆される。

引用文献

- 阿部謹也 (2002). 世間学への招待 青弓社
- 荒木博之 (1973). 日本人の行動様式—他律と集団の論理— 講談社
- Asch, S. E. (1951). Effects of group pressure on the modification and distortion of judgments. In H. Guetzkow (Ed.), *Groups, leadership and men* (pp. 177-190). Pittsburgh, PA: Carnegie Press.
- Bandura, A. (1986). *Social foundations of thought and action: A social cognitive theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Baumeister, R. F. & Leary, M. R. (1995). The need to belong: desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529.
- Cialdini, R. B., Kallgren, C. A., & Reno, R. R. (1991). A focus theory of normative conduct: A theoretical refinement and reevaluation of the role of norms in human behavior. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol. 24 (pp. 201-234). New York: Academic Press.
- Coie, J., Lochman, J., Terry, R., & Hyman, C. (1992). Predicting early adolescent disorder from childhood aggression and peer rejection. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 60, 783-792.
- Coyne, J. C. (1976). Depression and the response of others. *Journal of Abnormal Psychology*, 85, 186-193.
- Deutsch, M., & Gerard, H. B. (1955). A study of normative and informational social influences upon individual judgment. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 629-636.
- Dodge, K., & Somberg, D. (1987). Hostile attributional biases are exacerbated under conditions of threats to

- the self. *Child Development*, 58, 213-224.
- 土居健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文堂
- Downey, G., & Feldman, S. (1996). Implications of Rejection Sensitivity for Intimate Relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1327-1343.
- Fromkin, H. L. (1970). Effects of experimentally aroused feelings of undistinctiveness upon valuation of scarce and novel experiences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 521-529.
- Fromkin, H. L. (1972). Feelings of interpersonal undistinctiveness: An unpleasant affective state. *Journal of Experimental Research in Personality*, 6, 178-182.
- Ganster, D., McCuddy, M., & Fromkin, H. L. (1977). Similarity and undistinctiveness as determinants of favorable and unfavorable changes in self-esteem. Paper presented at the meeting of the Midwestern Psychological Association, Chicago.
- 濱口恵俊 (1982). 間人主義の社会日本 東洋経済新報社
- 本多潤子・桜井茂男 (2000). 日本語版拒否に対する感受性測定尺度の作成 筑波大学心理学研究, 22, 175-181.
- Horney, K. (1937). *The neurotic personality of our time*. New York: Norton.
- 黒石憲洋・Erlandsson, A.・佐野予理子 (2010). 独自性欲求が「ふつう」志向性に及ぼす影響—日瑞比較データを用いて— 日本パーソナリティ心理学会第19回大会発表論文集, 40.
- 黒石憲洋・生井裕子・佐野予理子 (2015). 小学生における「ふつう」(1)—相対的遂行と感情状態の関連から— 国際基督教大学学報 I-A 教育研究, 57, 57-67.
- 黒石憲洋・佐野予理子 (2012a). 「ふつう」認知と感情状態の関連における個人差要因の影響: 成功回避動機の観点から 日本心理学会第76回大会発表論文集, 142.
- 黒石憲洋・佐野予理子 (2012b). 「ふつう」認知と感情状態の関連における集団主義傾向の影響 日本グループ・ダイナミクス学会第59回大会発表論文集, 210-211.
- 黒石憲洋・佐野予理子 (2013a). 中学生の他者比較における感情状態: 性別差および個人差要因の検討 日本子育て学会第5回大会発表論文集, 74-75.
- 黒石憲洋・佐野予理子 (2013b). 「ふつう」であることの安心感(12): 世代間比較研究 日本心理学会第77回大会発表論文集, 220.
- 黒石憲洋・佐野予理子 (2013c). 「ふつう」であることの安心感(14)—文化的自己観からの検討— 日本パーソナリティ心理学会第22回大会発表論文集, 121.
- Kuroishi, N. & Sano, Y. (2015). "Normality" at a social comparison in East Asia: Focusing on individualism/collectivism. In *Proceedings of the International Psychological Applications Conference and Trends 2015*, Ljubljana, Slovenia, 345-347.
- Leary, M. R., Haupt, A. L., Strausser, K. S., & Chokel, J. T. (1998). Calibrating the sociometer: The relationship between interpersonal appraisals and self-esteem. *Journal of Personality and Social*

- Psychology, 74, 1290-1299.
- Lefkowitz, M., & Tesiny, E. (1984). Rejection and depression: Prospective and contemporaneous analyses. *Developmental Psychology*, 20, 776-785.
- Maslow, A. (1987). *Motivation and personality* (3rd ed.). New York: Harper & Row.
- McClelland, D. C. (1987). *Human motivation*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- 小川時洋・門地理絵・菊谷麻美・鈴木直人 (2000). 一般感情尺度の作成 心理学研究, 71, 241-246.
- 岡本浩一 (1985). 独自性欲求の個人差測定に関する基礎的研究 心理学研究, 56, 160-166.
- Salovey, P., & Rodin, J. (1986). The differentiation of social-comparison jealousy and romantic jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 1100-1112.
- 佐野予理子・黒石憲洋 (2006). 「ふつう」であることの安心感(1) 日本心理学会第 70 回大会発表論文集, 215.
- 佐野予理子・黒石憲洋 (2008a). 「ふつう」であることの安心感(5) 日本発達心理学会第 19 回大会発表論文集, 273.
- 佐野予理子・黒石憲洋 (2008b). 「ふつう」であることの安心感(9) 日本心理学会第 72 回大会発表論文集, 88.
- 佐野予理子・黒石憲洋 (2009a). 日本における「ふつう」の意味：自己改善動機の観点から 対人社会心理学研究, 9, 63-71.
- 佐野予理子・黒石憲洋 (2009b). 「ふつう」であることの安心感(1)：集団内における関係性の観点から 国際基督教大学学報 I-A 教育研究 第 51 号, 35-42.
- 佐野予理子・黒石憲洋 (2012). 「ふつう」であることの安心感(11)：自我関与の観点から 日本グループ・ダイナミクス学会第 59 回大会発表論文集, 188-189.
- Sherif, M., & Cantril, H. (1947). *The psychology of ego-involvements*. New York: Wiley.
- Snyder, C. R., & Fromkin, H. L. (1977). Abnormality as a positive characteristic: The development and validation of a scale measuring need for uniqueness. *Journal of Abnormal Psychology*, 86, 518-527.
- Snyder, C. R., & Fromkin, H. L. (1980). *Uniqueness: The human pursuit of difference*. New York: Plenum.
- Sullivan, H. S. (1937). A note on the implications of psychiatry, the study of interpersonal relations, for investigation in the social sciences. *American Journal of Sociology*, 43, 157-164.
- 高田利武 (2000). 日本人の「非自己高揚・自己批判傾向」再考—その規定条件と感情体験の実験的検討— 日本心理学会第 64 回大会発表論文集, 162.
- 外山みどり (2004). 心理学的状況の分類に関する探索的研究 学習院大学文学部研究年報, 51, 175-191.

註

- 1) 本論文を構成している研究成果のうち、独自性欲求に関する結果は日本グループ・ダイナミックス学会第63回大会(2016年10月9日～10日、九州大学)において、拒絶感受性に関する結果は日本発達心理学会第28回大会(2017年3月25日～27日、広島国際会議場)において、それぞれ発表されたものである。
- 2) 受容や拒絶の知覚は、必ずしも実際の受容や拒絶を反映している訳ではなく、知覚のみによってもさまざまな影響が生じることが指摘されている(Leary, Haupt, Strausser, & Chokel, 1998)。
- 3) 拒否に対する感受性尺度(本多・桜井, 2000)は、項目分析においてフロア効果のみられた2項目を削除して16項目とされているが、本研究では元尺度に近い18項目すべてを使用した。また、Rejection Sensitivity Questionnaire(Downey & Feldman, 1996)は期待×価値理論(Bandura, 1986)に基づいており、さまざまな場面での受容あるいは拒絶される可能性の認知(期待得点)と、それを心配に思う程度(価値得点)をそれぞれ独立に測定し、その積を感受性得点とするものである。しかし、本研究では回答者の負担などを考慮して心配に思う程度(価値得点)のみを測定し、拒絶感受性の指標とした。
- 4) 概念の性質上、独自性欲求と拒絶感受性の間には一定程度の負の関連があることが予想される。実際に、本研究において得られた尺度得点間の相関係数は、 $r=-.30$ であった。
- 5) 本研究では、相対的遂行×個人差要因の交互作用が有意であった場合の多重比較については、煩雑さを避ける目的から、相対的遂行の条件内における個人差要因の群間比較のみを記述した。
- 6) 岡本(1985)の独自性欲求尺度については、大学生 $N=486$ の尺度得点(項目得点の合計)は $M=94.0$ と報告されており、これは1項目あたりの得点に換算すると $M=2.94$ となる。また、本多・桜井(2000)の拒否に対する感受性尺度の価値得点については、大学生および専門学校生 $N=431$ の尺度得点(項目得点の平均値)は $M=3.45$ と報告されている。6件法のため直接比較はできないが、理論的中央値($Me=3.5$)よりも低い値となっている。

(受稿日 平成28年10月30日)

(受理日 平成28年12月7日)

Research Paper

A Within-Subject Study of Affective Reactions to Social Comparisons by considering Individual Differences in Need for Uniqueness and Rejection Sensitivity.

Kuroishi, Norihiro

Associate Professor, Professional Program of School Education, Japan Professional School of Education

Sano, Yoriko

Lecturer, Department of Communication, College of Interhuman Symbiotic Studies, Kanto Gakuin University

ABSTRACT

This study explored how individual differences influence affective reactions to the “normality” at social comparisons among Japanese people. Previous studies of social comparison by between-subject designs (e.g. Kuroishi & Sano, 2015) have failed to demonstrate substantial effects of individual factors. Therefore, this study was designed to treat social comparisons as a within-subject variable. A panel research was conducted (N=17). Participants responded on six occasions with an interval of one week to questionnaires assessing five social comparison situations and to scales assessing individual factors. Results corroborated previous studies and suggested that relative performance influenced positive affect, whereas similar performance to surrounding others determined negative affect and calmness. Need for uniqueness buffered the impact of social comparison particularly in lower-performance situations, whereas rejection sensitivity moderately amplified the effect of social comparison. Appropriate methods treating individual factors in social comparison studies are discussed.

Key words: Social comparison, affective states, within-subject design, need for uniqueness, sensitivity to rejection